

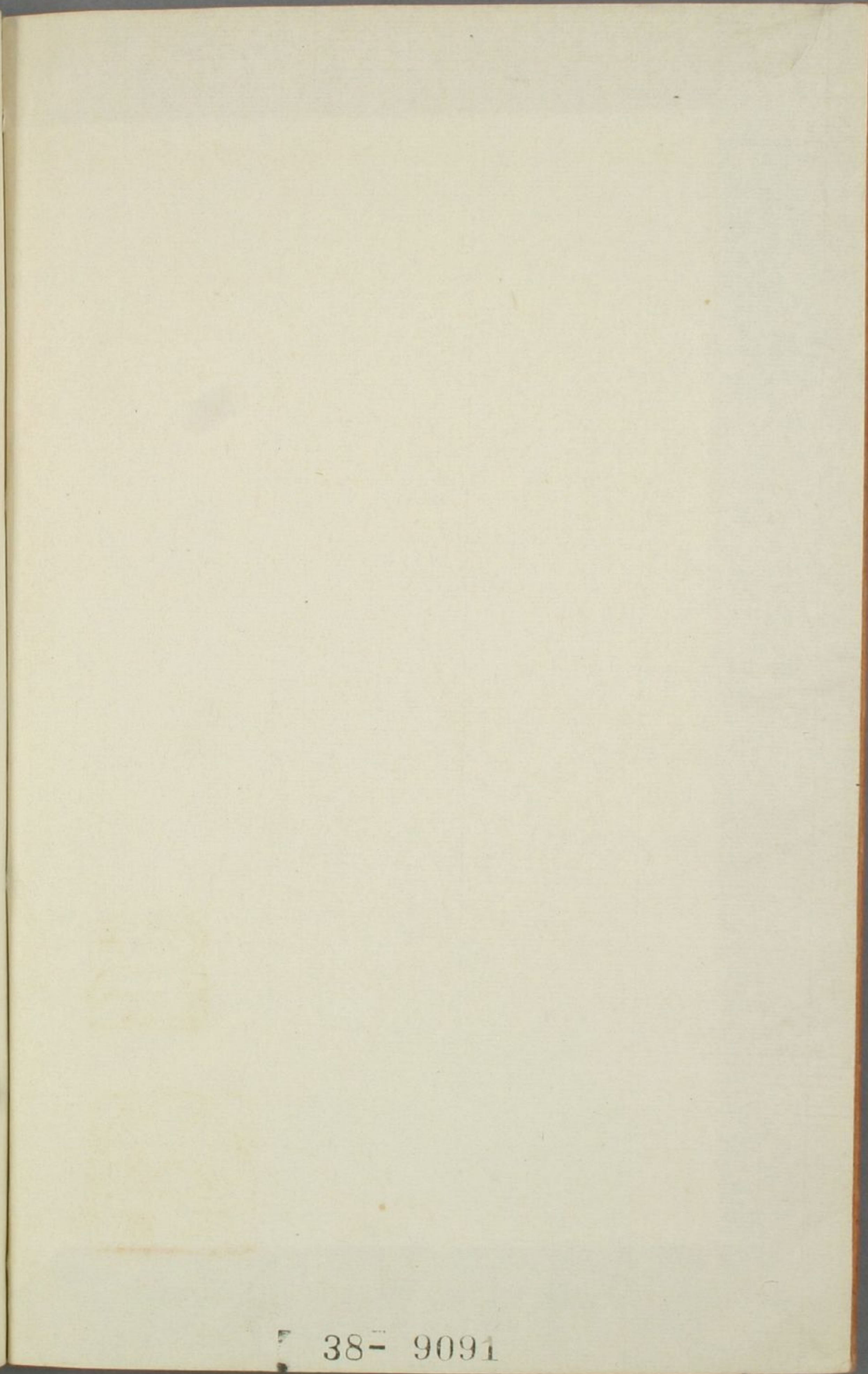
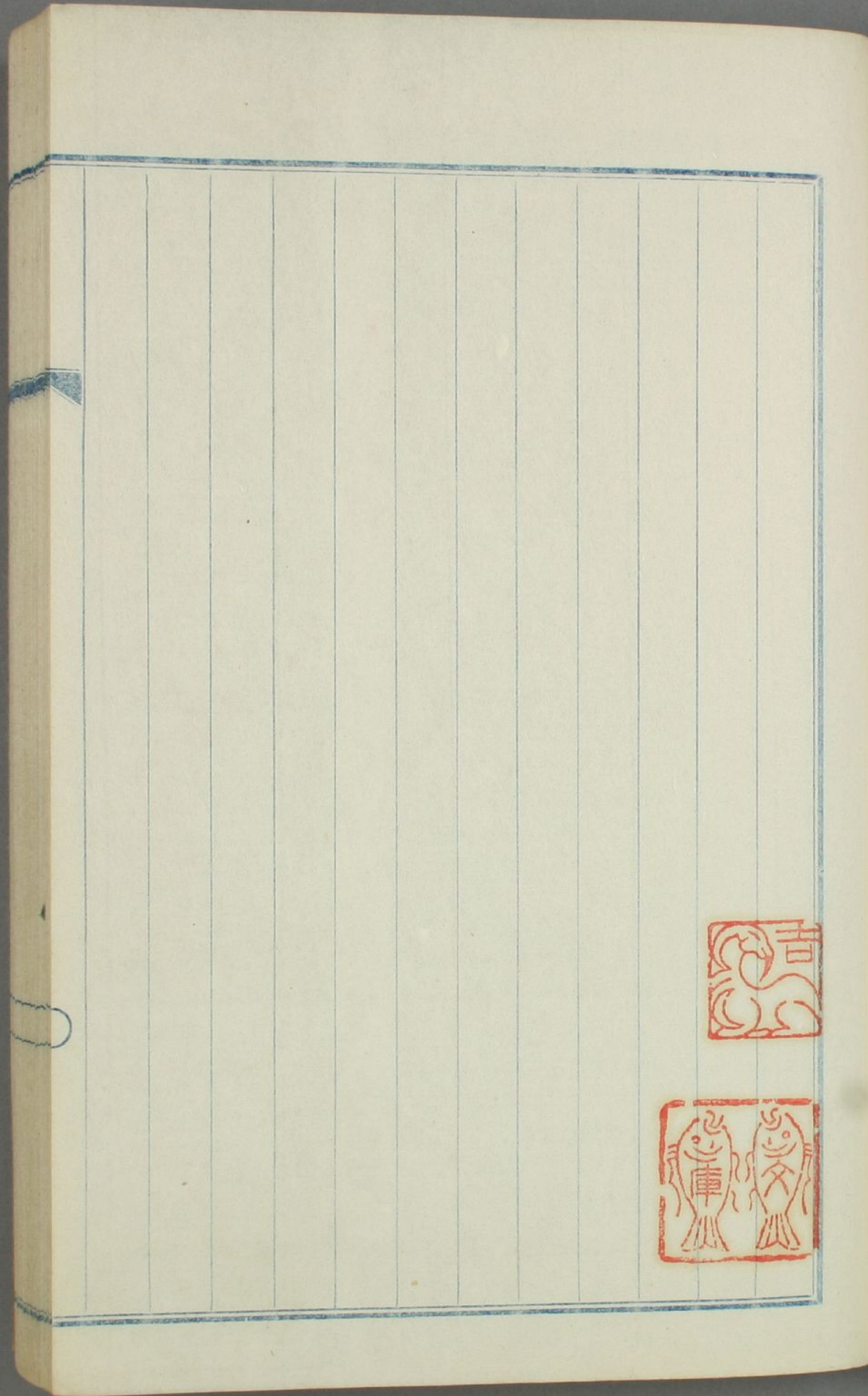
雙魚堂日載

四十六

大正四年十二月上院大政客中起筆

特別  
14  
1919  
295





38- 9091

浪弄秘中のつんくを感えんとえひ入浴のお  
 え悦寺をゆいし陸のこころもきらけり  
 昔のぬのをくつ其後集あつる故あ社をえ  
 悦の道結ぶ紙をゆつ一文を定めてよとて本  
 リなるを秘中しそく扶料と授く  
 池を得んぶぬつを報し左の教頁を暮るを  
 なるまのちこ載てそのの活ふ田一のぬ  
 へつうのきまの流石に長波のこそのを其入系候  
 の事南むる正しそ所あはれはるるの経山の文  
 を清く又掛るんともあつる又書るるを  
 のあつるはるるのあつるのあつる  
 なるくしてそののあつるのあつる

寄しあつてもぬれ料とて使ひし人多く説き載  
とてその法者と冬初に大坂を志しあつて男  
と此の四又を扱料とてこゝにありきあつて  
くこゝにありき

大正四年十二月初旬於大坂幕舎



### 本河清光悦侍

本河清光悦初の次郎三郎といふ次郎左衛門入道光二  
が長男と云ふ弘治三年と生ん寛永十四年二月三日に歿す  
八十一歳元禄北鷹ヶ峯に隠居し太右衛門又徳  
友高といふ(歿後一字を言て光悦守といひ其息を光  
悦守といふ)

光二は文政の次京都の所司代たりし多賀豊後守中原  
高忠の二男片岡次大夫が長子とて次郎三郎といふ本河  
清七世光心にはけの男子と云ふかは次大夫か妻の  
五世姉壽か妹とんはやくは次郎三郎と云ふは子  
と次郎左衛門と其職を嗣せしとて後又光心の  
實子光利出生せしめは光二自ら別家を建てて本家



リといふんと姉本か没せしと等持院將軍沈觀の向  
文和四年三日るんハ衣苑院御軍の副職ありしと  
安元年より八十三年の前ししと田明といふあり起  
深し先づることゆけし  
そのあま士人の刺髪せしにハ河河馬佛某河河佛  
とつり姉本ハ姉本河河佛とつりしと下略し  
本といふは姉本又その上下を省きて苗氏し本河  
河某と稱ししと九世光徳度長のはしと光豊公の  
舎よりし始と極折紙の祝刺を成し其次豊公より  
始し銅印(極折紙札の裏面に捺す)今傳(て  
宗家より)

別家よりし事を光利威し思ひて其長女を光二か子  
とて光悦のめあけは光悦か妹をこひてはか子の光  
徳にそのめあけは光悦(光悦若くし其長女と云ひ  
後希い願とてしはこのめあけ)光悦ハ  
其親ハつとて書書茶肉の書あるとて本  
しと且ハ光徳か子光寛かうしとてしとて  
つとて甘しと光悦と宗家歴代の内とてしと  
ハ光徳ハ光悦ハ光悦ハ光悦ハ光悦ハ光悦ハ  
光二ハ信見院右府公より親しとてしとて身  
照神后のいしとてしと今川義元ハ許しとてしと  
親しとてしとてしとてしとてしとてしとてしと

在せし頃をいふに食を給ふ女子克悦其子克瑤に  
て二石を給うけりけるゆゑに克悦か元和のけ  
め(大段後後西宮よりまゝにえりける所といふ)東  
照宮より食色二石を給うへき命下りける時  
うちを父か給りし食の所を以て一外をま  
年元江に駿河へ去りてあこけを  
て辭ひ去りけるも克瑤は克悦子とけんは其徒  
弟を養ひて子とす(父克悦と同年一寛永十  
四年七月五十六歳ありし)に段し其子克  
南(又書書二名内を能く職業最るもの冠  
とう室中富と稱す是は北地近お候に子い  
南の一字を授けり天和四年七月二十四日没す

微妙公殊に寵しけりて常々親しく侍りて食  
祿百石を増し給う年先隠居せしに又現米五十  
石を給うけり克南が長男克備が次郎三郎と  
いひ二年薨き時より親しく召仕りて  
て父の食を三石を給ひ其弟(克南が五男)克山  
か大石をいひていふと切きをいふと存き仰ことあり  
てお中公の御時に新に召出さるる男中石を給う  
けるやんハ克悦か子好といふこの克備かハ世の  
孫今之之廬 後柔と克山かハ世の孫今之長識を  
ありける

右は明治二年己巳の吉妻谷の御殿に何候せしに  
成瀬正長氏をもて本阿蘇克悦かことりぬを以

まひしをうぶ長氏の需ふうて記懐せりまうに記  
せしなるはおもひあはれなるこころありて投記句  
互あとおもひつゝ且移りしけりて志すまう  
年をゆるいもは年をふるをさく出らんか  
まのりしをきこまけりてまのりしをきこまぬ  
同し十あひしもの夏のすもるるに

長瀨進記

鷹峯記 寛永七年也

林羅山

夫鷹峯之為在境也九重之圍城魏々於其南一支之鴨  
河溶々于其東蓮野茶野接鄰于其前去州丹州通

望于其北或爰富陽在一峯之西或比叡徑舟於寸眸之中  
或拜雷社于良隅之靈鎮或挹舟岡為度際之傲山若  
夫離外者梅則隔林彷彿聞其巨廟之暗香况又長松鶴  
啼似移若耶之風物霜後爰楓則薄晚想像守雄峯  
之秋色加旃脩竹雪元如借鐘阜之日景氣此乃鷹峯之  
四時也林霏朝潤山氣夕佳花穿午暎月入紗窓此乃  
鷹峰之朝暮晝夜也且夫樵蘇唱於路耕牧起於墟  
行旅憩於坂鳥巢而不驚獸馴而不畏在洛外而人不  
遠非市中而徑有煤不江湖而有涓流此乃鷹峯之境  
致也依境以思人先悅叟蓋其人歎叟嘗占數百弓  
之地以構小宇於此自號大靈庵今依人而亦可以見  
境去歲一日太守源公赴鷹峯時偶誦余余亦從



行忍入自境、终日忘歸、其景殆如鸞所云也。史清余  
記其所見、大守亦屢德德焉、矣、得不言哉、於是  
思之、古人論書法、以山川星雲草木禽虫蟲之類、而比  
喻之、其間有如危峯、沮日者、有如夏雲、多奇峯者、  
有如鷹、時鳥震者、有如鸞、鳥乍飛者、別文字、權  
輿、自鳥跡乎、然則、雖以鷹、峯、論之、亦可也、世傳昔  
淳房、空海、師來此、而擬斯山、於靈鷹、就鳥、因名、鷹  
峯、鳥、海、師、得、書、法、三、昧、鳴、本、朝、今、也、叟、心、匠、有、巧  
尤、善、能、書、自、謂、花、鳥、風、雲、得、之、心、而、後、倭、字、漢、字  
應、之、手、故、心、在、筆、前、自、成、一、家、法、人、求、者、多、僅、依、盈  
戶、或、獲、者、皆、臨、花、鳥、鳴、呼、庶、幾、其、人、境、俱、得、而  
書、法、與、鷹、峯、齊、垂、於、不、朽、也

記中所謂源公為京尹、板倉重定也、今茲先生偶  
自東武、歸休於京洛、數月、其際、被重定、誘引  
而有鷹峯之遊、  
雁山文集卷十七

ふきほひ草 抄紙 天保三年春

又、哀、庵、元、悅、と、い、つ、る、者、能、書、なり、し、る、を、善、く、世、を、志  
す、と、い、く、世、生、ん、は、心、の、故、き、か、り、是、れ、ん、と、い、せ、し  
る、く、侍、さ、ん、也、又、し、う、し、又、世、に、有、る、へ、き、人、間、と、い、え  
侍、も、今、の、世、の、み、さ、ま、と、い、ふ、ん、聖、人、の、道、を、子  
ぶ、と、す、も、世、を、わ、か、る、た、め、と、も、と、す、も、う、似、た、う、境  
は、よ、を、わ、か、る、ま、ん、一、生、と、い、ふ、心、も、若、かり、し、時、は、り

物の教を合するものなくはかたしあるとあるしのかた  
くひ一生我家の内をきく 皇妃千代のせいの苦か  
州の大納言直に判書と給りけり千代とていひ  
きたるをええとていひのこり千代は打つていひ我  
身を軽くもてさうとて一程養育所のおごりもあるん  
ると思ひ信忠を罵るふさいきを命とて一かき首を  
信のいひもてる茶の湯もあつたすまひつけれに二三日三  
日とあつたつれをせよまかひとていひ茶をたせ生涯の  
うらみとて人のいふとていひあつたすまひもあつた  
おつたすまひけれもおとすなうとていひあつたすまひ  
のいひもあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
はとていひあつたすまひとていひあつたすまひとていひ

るおとともさうあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
休む世うううりけれはもあつたすまひとていひあつたすまひ  
茶碗茶を代るあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
の、都のいひあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
あつたすまひとていひあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
所を志つたあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
おとろけれはあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
かけはあつたすまひとていひあつたすまひとていひあつたすまひ  
のち打るあつたすまひとていひあつたすまひとていひあつたすまひ  
の底あつたすまひとていひあつたすまひとていひあつたすまひ  
あつたすまひとていひあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
あつたすまひとていひあつたすまひとていひあつたすまひとていひ  
あつたすまひとていひあつたすまひとていひあつたすまひとていひ

山より上はふとてみえしとてあつて一乗寺の里白川  
まきもあつと見え雪の路まき松とみえぬの月はいえ  
れまの山のまのこいしとてぬいしとてぬきとてぬきとてぬき  
は霧あつと見えとの山まきぬかぬれぬえの山ハ  
あ海のまなぢやと打るこめとてぬきとてぬきとてぬき  
引出てたが別路のうらあなると表の心をたて  
まき京のまきはなりにはあつとてぬきとてぬきとてぬき  
けやまきはは都のまき打こしとてぬきとてぬきとてぬき  
あつと山あつとてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき  
りがつと山あつとてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき  
山と四方かきつとてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき  
はの松もあつとてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき

とてわつとてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき  
とてわつとてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき  
とてわつとてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき

大日本人名辭書曰 克悦刀劔鑑定家とて侍々  
法最らとてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき  
市と強う侍々木家の族本氏ハ多賀父を宗  
十を回山本阿彌光心養うつとてぬきのまきはとてぬきとてぬき  
稱すの堀とてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき  
拭草とてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき  
特と淨拭と長じ侍々書を善くす初め山術  
関白龍山公と就きを清家流の手跡を能くし  
或とてぬきのまきはとてぬきとてぬきとてぬき

とう道風依理の貴然をるぬ遊入一家の風を  
起し古来未だ取の體を顯つる其能者多し  
三品より故し平安三葉（近衛伊尹公松花を  
昭乗る心克悦）の一人と稱せり又次瓦岳の陶造  
夫が茶碗をたふすも世人争ひて求む又漆  
其時信工と云る其物も心法職工の意あつ出  
ひるもの形嘆せり又土依の風を交へて乍ら色格を  
北友松を何し又土依の風を交へて乍ら色格を  
顯りし人稱して克悦風の書と云ふ其遺蹟子  
木多し一人物多し歎とのく墨画稀しと設色  
の淡画多し信工湯部家の多し（をぬふり乾  
故を得る）洛北鷹山峯丹波と通す山嶺傳

重盜賊群居か行集を恨りて寛永中克悦之  
を跡りて家を去り群賊悉く遁れ去り克悦自ら  
り寂院と稱し院に一寺を鷹山峯と云ふ克悦  
寺と稱す克悦資性喜ぶ鷹山峯に問をす  
ふふ及びて悉く佳品を親戚朋友と割興し自  
ら粗名を擇えし之を以て茶を喫し自ら娛  
む其言を聞く者皆其損壞を改むば人をい  
梁まきし一山坐る者少し瓷碗の價ひ易きより  
若くはしやと又鷹山峯の邊に墳坑五所  
つ人民其地味を受くことあからしと云ふ  
寛永十四年二月三日歿す年八十一（一説八十）



知りてんう今大其のひんををる希んとする  
お楊直るるるる想ひ利り免へす一笑しき  
但此北の香成松印昔の題し金く印譜  
形の不冊ありて傳ひ常集又七澤文あり  
半紙の古体と直入の画あり外に奥の  
山の題ありし力あり印と三千款の標記  
七五六款を収りて過ききや要する一種の  
考りき多常集取表者ありこと云ふはし  
北の本に就て其表の巻を碑一の石に記す  
て知り得るものあり左の抄録す

(前略)江都乃先生捐館之地其墓碣在十  
石川無量院乃其門人楠為六等所立而大

典禪以銘之又京師人源惟良等輯先生手  
鶴私印七十款而為譜凡一百本以分贈先生  
親故其印則塵之東山一心院建碑其上東  
紫博士為銘之嗚呼先生時望高起亦可以  
想見也余頻年漫遊次高浪善私謂此地  
亦先生所來也然其遺縱其繼其緒業  
者併無有矣余感昔之餘敬慕愈不已  
遂欲出所為二書釋之而此原本也先生之  
所深留心而手澤之存者則煙之勝際之地  
而碑其上聊以記做京師江都諸子為所  
云々

(大正四年十二月七日大改定中記)

○此中本有方許と并の如く揚守敬諸語附し  
る家字と石不問ハ十餘枚と得たり吾し未嘗  
の者家養守敬手許の装釘本貞石問  
之れを得る重福と免れり但此石未だ早大  
の圖者彼と謝し且つ今本局に在る之れを  
得る難しと云余之れを得るを終る  
るさんと唯するの中

○十一月八日寒甚し旅家菊此終る奔至二夜ん又市  
格と懶し一松と似け終後板橋題畫を讀み  
念心の語乃ち報す此時佛より浪子紅塵中  
人等を志す

頑然一塊石、臥此苔碧階、雨露亦不知、霜雪亦不  
識、園林寂寞衰、花樹或更易、但此石先生先  
生俱記得、

昔人謂石可轉而心不可轉、汝謂畫中之石為可轉  
乎、予里亦有畫、其石之心与石俱佳矣、

米元章嘗論石曰瘦曰皴曰漏曰透、可謂畫中石之  
妙矣、在坡又曰、石在文而醜、一醜字、則石之千態  
萬狀皆從此出、彼之章但知好之为好、而不知醜  
亦之中有至妙也、東坡胸次其造化之爐、亦  
變畫此石醜也、醜而雅、醜而秀、弟子朱子  
雷亦余畫、不得即以是奇之、方雷神中尚有

元季之石、高臺其、厥矣、

拙天揭地之文、震電驚雷之字、以神寫鬼之法、

無古無今之畫、原不在尋常眼孔中也、未畫前

不立一格、既畫以後、不留一格、亂世不共

峭壁一千尺、注希林蘭花五空瓊、下有采樵人、伸手折

不得、峭壁蘭

東坡畫蘭、長帶荊棘、見君子能容人也、吾謂

荊棘不當畫以入目之、如回之爪牙、王之扁臣、

自不可廢、蘭在深山、已無塵囂之擾、而用荊棘

之、庶將禦之、以行蟻之、然虎豹豺兔狐之屬、

將噬之、又有植人將拔之、割之、若得棘刺為之

護、據其言斯遠矣、秦築長城、秦之棘刺

也、漢有韓彭吳、漢之棘刺也、三人既誅、漢身以

沛、遂有安得猛士守四方之慨、然則漢棘刺、傲漢

角鹿、角棘刺之設、安可少哉、余畫此、陽山上山

下、皆蘭棘相卷、而蘭得十之六、棘亦居十之四、

畫畢而歎、蓋不勝幽并十六州之痛、南北

宋之悲身、以無棘刺故也、昔者蘭棘刺、回

日本故人、畫此、亦又、と能くするもの、竹田曰

く山物、而して、此身、名目、傲ふ、今、板

橋の物語と、後、及ん、我、の、彼、を、鑑、

た、以、遂、き、と、之、心

○約あり、人、列、し、中、間、を、生、す、旅、定、中、竹、相、本、を、測、す

中、に、酒、壽、一、篇、あり、一、篇、唐、の、一、句、從、く、噴、飲、す



馬のちり、壽と高は本邦の薺のみきまの今た、牧向を  
記す

此種・詠諧の如く車風と詠く、所々あり、意あつた  
句をとり、年り意あつた、文つら、あつた人を傷かす  
し、おのづか、風刺の意を寓せ、あつた汚穢  
することを通して、あつた流石に支那とあつた  
字め、四、詠諧、あつたを極む、あつた支那と  
酒全あり、酒壽と趣を同あり、而して西廂記酒全の  
めきま、終、此の夜、酒壽と及、心す。

十二月九日漫記

- 對影少聲と可憐 短視者哉
- 荒政解語と傾側 口吃者哉

○ 亂殺平人不怕天 遊園生飲

○ 為他人作嫁衣裳 年及娶妻者哉

○ 天生舊物不如新 續弦者哉

○ 猶堪一飲主叩頭 中年未有子者哉

○ 細賊爪克我招奴 手捧新襪者哉

○ 何人種向傳回裏 生子者哉

○ 二水中分白路海 茶酒並列者哉

○ 新鬼炊客舊鬼笑 醫者者哉

○ 莫道人胡語不知 懼内者哉

○ 身上無有完肌膚 良喜馬胆懼者哉

○ 一生長帶水晶盤 帶眼鏡者哉

○ 八面不知何處去 懶多者哉



多...物...其...一...  
多...物...其...一...

凍雨初晴，僧階之苔絕，解客履，因坐庭陰，畫此匹馬，不斷不動，尾搖尾，乃於尺幅見之。馬乎，馬乎，奉體無千金之裝，皮相者何能估價也。擲筆一笑。

言此老驥尚有壯心，譬之於人，不無日暮途窮之歎。世間罷羸者觀之，謂之然，同一傷感乎。又題一詩，聊以解嘲。古戰場中數箭瘢，悲涼老馬憶桑乾。而今衰草斜陽裏，人作牛羊一例看。

世傳韓幹畫馬，一日有人詣門，自稱冥使，請

出為坐騎，公乃畫馬一匹焚之。後於寢室見前冥使，來謝云：閻山退迫，賴公無改涉之甚矣。其感日甚，若果乎。今余言此，願公通靈，安得有未之者入夢而相告也。

冬心有畫外記中，我凡石方石之石名，以狀  
完家放...  
完家放...  
完家放...

唐墨五升，畫此狂竹，查一牙，不可屈伏。天上天下，吾願斷取一竿，贈之不釣陽鱈，而釣諸侯也。世中有眼大如車輪者，定知此意。五月十三為竹醉日，杜秀才從太原來，遺桑落酒一尊，余獨嘗竹下，餘漉漉之，三杯通大道。



すもな依る所、宛角識得と題する有形式に流る徒  
々回書と文字と形容するを四能事とす、如欲と  
唯に重複の必し居故又なると免れんが回書意の  
及ハる所を文を以て禱ふ於是改行初め申あ  
り然れども此の補の意味は於ては往々形式に陥り  
書画に就て是るは聯想し得べき事、  
すもな多し未だ以て題識の要を得以て許す能  
いふ筆り支那文人殊に清朝の文人初めは常套  
を破り抱懐を盡し徹すゝか揮し、畫に托して志  
を披瀝するものあり、畫を心すの至る義を志向す  
る畫論を題するものあり、故事典故を叙するもの  
あり、其の題する所も様々として、或人と端倪するものあり

於是題法流動讀むれば或具を免へ畫又之に  
依り光彩を添ふ傑々支那文人の畫を繪め、南  
り殊に長、  
り

此類の條々能く存、  
二類、  
所見を附すと云ふ大正四年十二月十日於浪華  
冬余を假するなり

○十二月十一日、  
畫の、  
こへきもの也表紙に文品自著の題書のあり











望幅の四

勿論見よきよの多し、たゞの望の東歴を  
このを以て遺志に傳ふ

宮本三天市、枯木鳴鶴圖 内田基徳紙

宮本武敏の画、筆致尚洋、その筆格

高し、これ等し、其の特徴をたゞか押

し、此者の一二をん、此畫は、色澤華山の意

既し、そのまゝ、此畫の青けり、華山の筆に

成る、と云ふ、目録の注に云く

信東の狀より、此幅は、係幕府四谷寄力須

賀川某所蔵、某曾與、色澤華山、其子繪

事、於金子金陵友好、華山、一可見、此幅在

予市、欲購之、無資、且恐他人攫取、因謀  
須賀の氏、歸其有、至今日、華山、年二十九と  
あり

岩伝又兵衛、自畫像、系、道、磨、回、二幅

福井 榎尾長左衛門、紙

小品、その画中、刻意あり、長髯、度、面、人、持

子、侍、これ、自畫像、その目録に云く

岩伝又兵衛、江戶、戦、年、あり

其、病、の、癒、を、し、其、自、其、像、を、畫

き、其、病、の、癒、を、し、其、自、其、像、を、畫

系、の、文、中、に、見、え、る、其、畫、即、ち、その

自畫像、として、福井、に、伝、へ、る、岩伝の本家

廿二之を傳く彌生殿の代にありと橙屋  
氏に譲り置きたるものなりと云ふの亦在りし  
るゆゑなりしもの

此の條に附帶して一書の家系あり此書係と  
共に岩佐本家に傳へたるものなりと奥に書後  
辛未の年あり明代傳へたるものと見え又  
けんしん

在る藤岡も同じく岩佐家より傳へたるものなり  
ふ大兵衛の傳書に記ししもの標をとも  
見えしもの跡に記ししもの也

浪色藤岡の傳書に月下の核

山崎の伝本



此幅藤岡の傳書にあり、傳書に七世に名をききあり  
當りし之れを兄し時其の再見、後年、此書を  
在るものも麻祝教十合傳細書に傳へたるもの  
而して重んじ又見えしもの標榜を得たるものなり  
幸に此書西流に接する節、既に此書を何人も  
及び難きものなり、其の中本東天下の文に

横書

慶應義塾に在る現在因果經書二卷

内田董心

天平因果經を鈔出たに當りしものなりと云ふ  
き、此書のありしものなり、其の傳書に天平

因果經を大いニ跋きを同のち喰ひ方体一ニ編  
食代のものなるをある世上之れを新因果經と  
稱す月經注と撰んハ此の二卷のみに根津流  
一ハ為田を各一卷とを存すと云ふ各卷尾  
ニ「畫師法橋慶忍並子息聖衆凡して是れ且  
建長六年の節ししハ宮姫の名を稱す慶  
忍慶恩之形似たり」所々人往々撰り慶  
恩書と云ふ之非ざる

池大雅也山人物回一卷

村山龍平一卷

畫ハ九寸許六遠四方士の回一と水墨と  
若もこれ畫の精微大雅に稱すのこゝ

也寶曆十二年四十歳の時甚き疾をの爲め  
畫きしものと云ふあるの如くし夜所  
一の年と村山と稱すはと云ふ龍平一巻と大  
雅自ら「家録の註述のよる京田五以五  
え因(終天壽考)河合の雲書(竹園)の  
子龍(而森白山)の序後あり

慶鼎著地獄考相畫卷 二卷

九鬼隆一卷

ニ卷の由一書は文中に彩色の圖あり畫の力  
勁地獄考の想條ありりり致味あり慶  
鼎の閱歷深しと云ふありと云ふ似しに  
上流古式(辰七月十考)已射親氏比丘慶鼎

秋元経書共ニ葦下之、大和七平群部龍田郷  
龍福寺之知事洋土比丘法光持之者也云々  
とあるハ葦下もあまふし此程の書止て通事  
の八珠とせり而して余印つて珠とせり

馬醫書止て 一卷 松本初子氏

此書 鎌倉中期のもの、葦高(或は生隆或は隆  
重と云ふ)洋のうきうきとせり福倉代と動植  
物と精宮せりとのらして松本を珠とせり  
昔末に左の如く記せり

七郎兵衛尉志泰相傳之文永四年卯正月  
二十六日評西阿(花押)

松之部

公文晁老ト公鈔探訪<sup>ニ</sup> 松平定時氏

寛政年子松平樂翁海濱遊ぶ所の用紙  
と書ひて豆おの地と述るをしの同様の文  
晁に定時翁と云ふをしの公自ら  
書し公鈔探訪と云ふ書名にありき事  
とあり余之を初見せし時司出の漢の  
回をと思ひ附箋入をせし文是の多氣  
ゆはとありき事此の二帖を今も洋  
書とせり





海之氣可利き以て暢也

床上に祀せしむるにふしむる石を念心の一のこ  
にあり一萬曆密方なる式方廿尺四五寸  
許の花瓶(細き形多)古希色鮮明新  
おのぬきふしむる石の貴重の云とある一と  
古樹六尺のぬきもも里漆のぬし中持  
習ひおとすの栗山の刻銘あり

植之達三天横之塞四海以揖則诸天善  
神合掌作禮以麾則障魔外道留羅  
蟹走、劈頭劈面、打下崗浮提衆生貪  
總喚恚、打醒得苦心精進、鑽出金剛  
智、良苦良苦、柱頤鞞、一睡夢、卷靈



山會下、觀破う妙法才一義、你道是真  
是、此、肥、皆、滿、瓜、蟻、蟻、皆、具、甚、苦、院、棚、此  
與、溝、漸、其、天、孰、全、保、未、在、乎、亦、三、生、級  
寬、以、辛、酉、春、為、佛、唐、書、栗、山、印

床脇文具

硯

紫端溪 銀寶篆 即此方將未

筆

堆朱

筆架

天龍寺古硯墨干淨の

墨

如卷鳳龍 吳鳴球存墨

墨床

瑪瑙

水滴

金紫銅鳳首と蓋



帖 冊

鎮子

楊文駿山六八帖

四条亞規三十六人帖

道鏡のあまの巻  
後帝極良帖

瑞珩 双乳鳥

卷目一々録セリ

○所収諸紙流に於て内々強効果出心流諸紙  
及諸紙首紙の流流を始末す可し終に壇上  
舟落し流流初を奪ひ去るの粗思を流す余  
父の事又おとと徳川初倫候に扱え南



藝文の事ありて高名果々又おと自初率と曰葉  
流流に三言ありて比九の流に一なりて  
出入せる流流に三言ありて三言ありて流の  
二流一程の流に打九なりて三言ありて流の  
永の信もを三言ありて三言ありて流の  
言の三言ありて三言ありて流の  
三言ありて三言ありて三言ありて流の  
呼流しと流に流ありて三言ありて流の  
くみなるるんしと流ありて三言ありて流の  
流流七人の流ありて三言ありて流の  
の流流七人の流ありて三言ありて流の

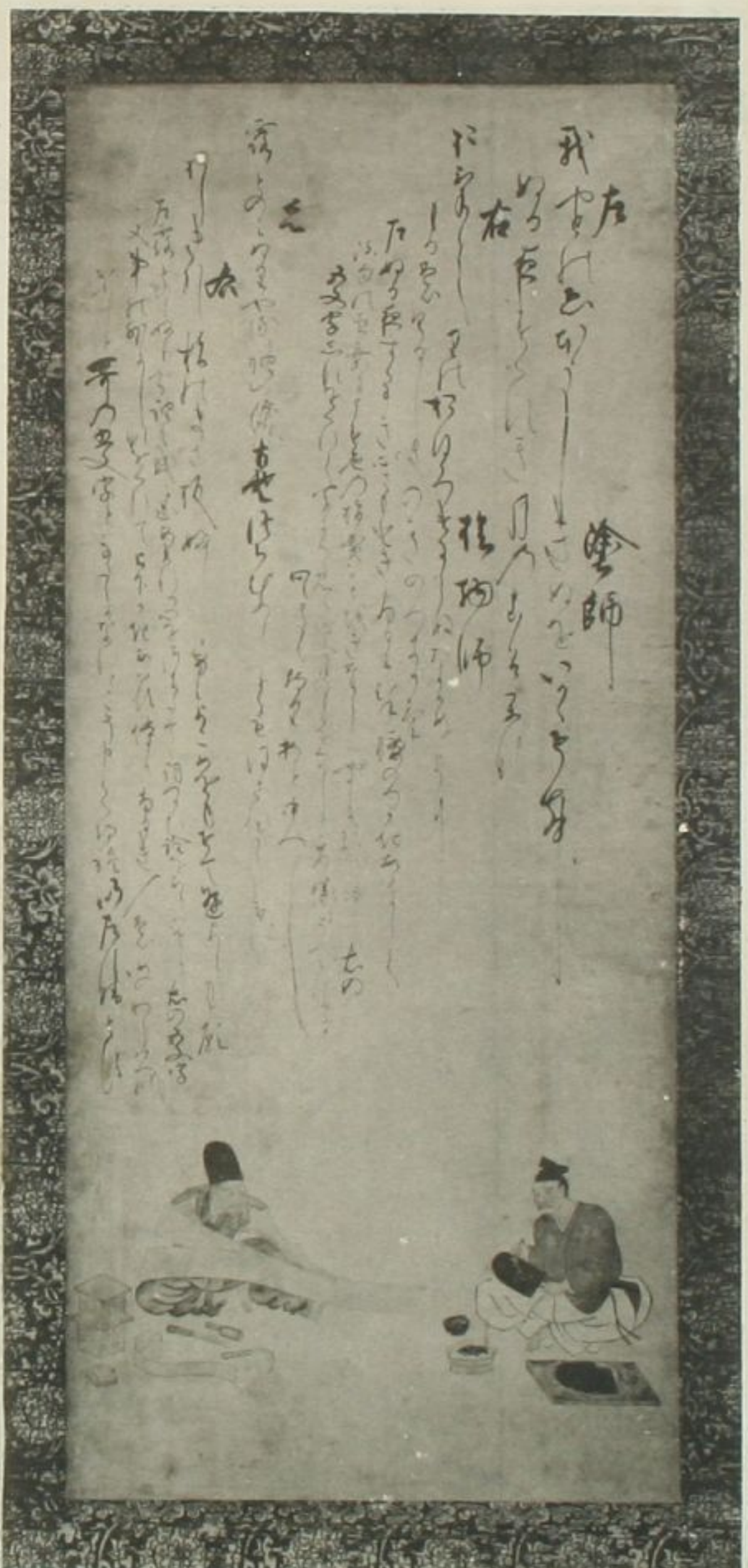
時を改に閉居し世をく文おの院とし出来るを約  
同乗物をもと氣伯を名あつんとを早稲中野に別  
り興つてありし伯の意をくし度り来るをくを  
つるは健康を祝して以伯伯の漢院中教を祀地  
しし居権を侵害するより近うしとそふの一語に  
つき此一語を日本のお島法の物義を名を押し  
するもの之れをそふの字おの伯のめきき勇気あ  
る人いあらざるは能くありて七伯に勝するを此一  
語あるとそふ伯の例の大元氣をくし言ふらあり  
く細くは説的する積りありしり以當りたる能  
極のたええを名を名し得るをくしを名を名を  
りいと云つるをえとをし能極の能を武上全の

中し何除名の由候こととをすは漢り出る改  
名百り今改んる四く武上全の上出自身を  
治すを所謂古陽名を名を更けたるもの由本  
院院の人よりしりしと漢院然名の出提にまつ  
べき人おらうとて名客共笑す余伯に一進言  
とあり

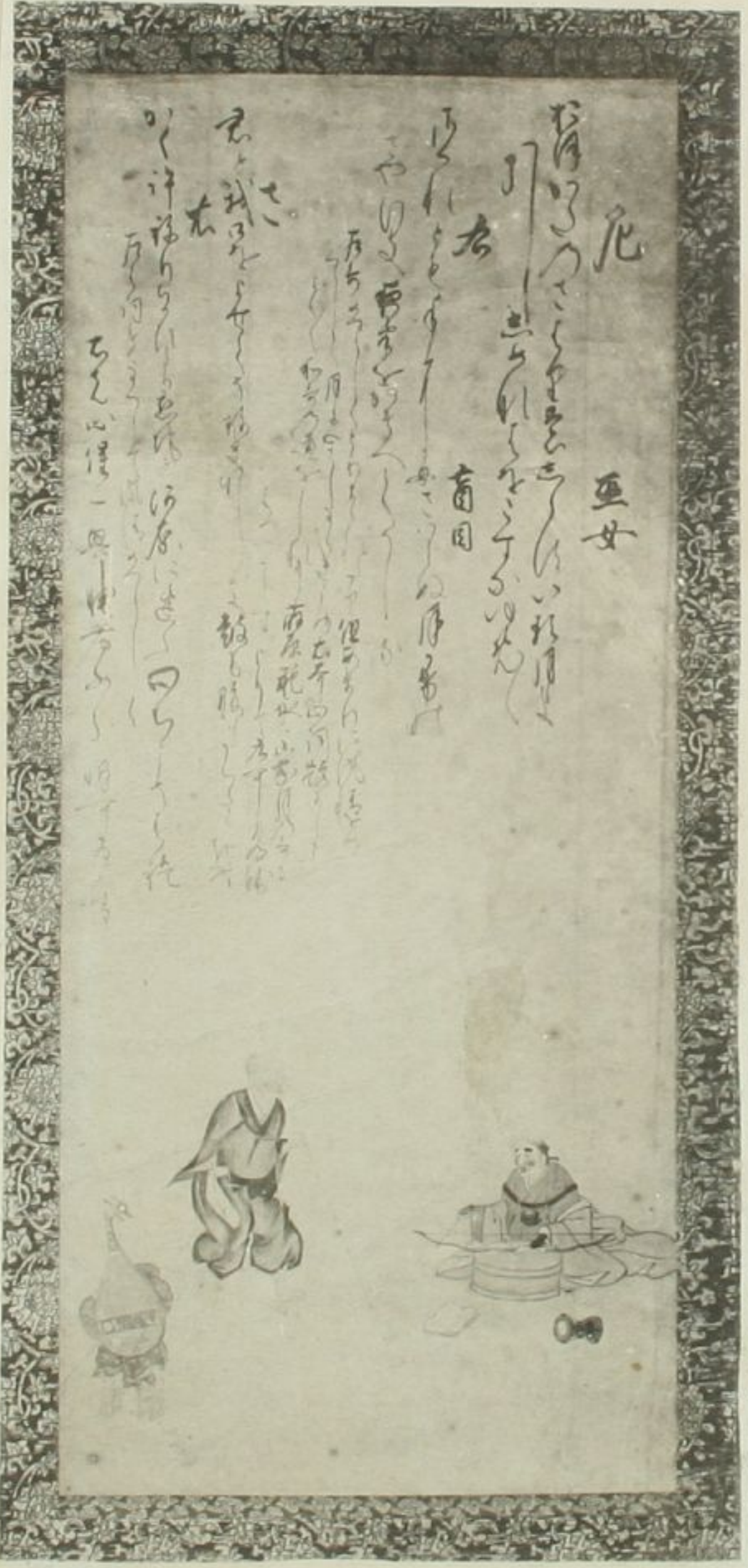
日暮きる際をくし文おの院の上の物何候ありと  
くを漢の候を得るもくし信り能くくハ此  
場を名を業業集あ筋の改名を以つて清河伯の  
子名あ筋あ者く下んことをくし内各く大印  
印する所より伯の改策改に言業集あ筋  
あることとを言業集あ者く名新物とんくを信り



皇泥法系既いさあふかあは正見の瑞共院所  
 のいとのそあ後醍醐天皇の御代に  
 自書山後多家の後伏見帝御代(於八十首)  
 其後水尾天皇御代に歌合の始  
 とす(歌合)の事摩名家とてとて



十二行 皇代



後水尾帝御畫讚職人歌合  
 紙本 長三尺六寸八分 幅一尺六寸

外に儀式時ありて海列きる中こそ若と若き  
 りて伏見倫宜極十一歳瑞玉向のりて若き



○田崎象二(貴)即三歎を高くし事々しくあり  
 余美つて贈ひたる任天の流初幼後名坂ある  
 又一流の文人也彼人而も沈酒し自ら以  
 つて筆癖の海を以つて信すれ其の  
 時著つて所のいよる筆癖の如きことあり  
 し然れども彼んを清く子のまゝあるを  
 け又書手あるの殊味あり時俗一時の  
 才傑も亦初幼の文人傳にあり  
 かくもあつた二十年来人の私印の  
 確存を既し随つてせんといへば  
 善し而人の位牌も存するの意也を以つ  
 てこれを據つて同一の意を告ぐ出づ

刻者十品教人

田象二



任天  
 居士



史云  
 解世提

○此物文徽ののきり草書あり傳未詳うる  
 すと名も之れを床上一つ掛けば書き一室を盛  
 するの故なり昔此丸語七六起凡そ家内  
 床下、物なりす。○このまじり如幼の物也草  
 書あり草書一七起ありとありてす。

後云凡道以淑為明  
 西為安の心之然而有  
 大人之志母為一方之徳心  
 西天下之通母亦人か而求  
 一知ふ求同母而求同理

方季子  
 字之惠  
 の弟勝  
 中人  
 号あり江

○えのえ悦寺七位印の如印の取すもたみきお  
 こ清のて字類を執る木印も持印とて一さ  
 とも也とて一之れと持するは肉池を因ひす  
 一と書下こ書と取くまもらんを海よりつくは  
 とえ悦あめゆの法のことと書取七位印とてさ  
 入持ありて一が徳紙と持し持物よりたしと

持しこんありてさきさうと  
 カハンの書字を掃くか  
 し勢印の如印とてさ  
 ぬのつらとてさ



○双魚の中一ニ木戸をえの古蹟を存せしめ  
とて此の國の海軍の発展を期すべしとの  
政治家の古蹟を國の海軍の発展を期すべしとの  
言ひ其をえくす例に一書井上馨にまか  
る古蹟を得たり内宮と見え木末海軍書院  
の跡の中井上馨の廟をの方針を  
云々せしめ也善し木戸公の古蹟中  
の遺蹟ありて容易に得べしとの言ひ其の跡あり  
以つて双魚の中一ニまかす其又左の如  
く

一 木末の未だ

大變に申す申すの言ひをいふ言ひに  
悲憤と志願を於言え七上下に働

哭あ大方の抱負ありて何れも未だ抱  
解、心地好、生半くして悲願若心正の  
此をもちていふ言ひ先達を十年の間に  
こいゆうの如しとや仰ぐ、一書一書か  
預子めおふ所、実用し者政の如し  
言ひしありしり御言ひ、いふ言ひ白  
の御言ひおふ言ひ、御言ひ、いふ言ひ  
子口をもちて、生半く、いふ言ひ、御言ひ  
こいゆう、断乎、いふ言ひ、御言ひ  
いふ言ひ、御言ひ、いふ言ひ、御言ひ  
いふ言ひ、御言ひ、いふ言ひ、御言ひ  
いふ言ひ、御言ひ、いふ言ひ、御言ひ  
いふ言ひ、御言ひ、いふ言ひ、御言ひ



とあるを了し、只理に一は、此の信長は孝の  
冬不に依、奮忠に於、十一の、余の、機よ  
うし、く、く、く、家、要、海、ま、人、々、及、二、雲、の、  
の、ま、方、く、く、一、歎、如、終、艱、難、の、末、大、村、お、  
く、大、妻、あ、く、し、又、先、一、轍、く、く、く、く、く、く、く、  
く、起、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
高、早、者、厚、厚、く、く、の、大、妻、く、く、夫、ボ、の、弊、  
朝、廷、上、く、お、お、脱、く、く、出、来、く、く、く、く、く、く、  
朝、廷、上、く、弊、官、の、二、此、く、く、く、く、く、く、く、  
朝、廷、上、く、奉、為、歎、け、く、く、余、の、く、く、く、く、く、  
此、故、中、後、地、を、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
式、之、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

三月四日

廿おえ

いぬ

え

ま、の、守、無、軌、難、の、故、累、朝、儀、一、轍、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
義、の、大、く、儀、を、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、の、状、累、朝、上、く、難、必、く、く、く、  
く、く、是、九、難、れ、く、く、の、ぬ、次、只、料、也、  
此、方、後、あ、く、く、く、漢、く、く、一、く、  
く、く、の、由、お、お、お、聴、く、く、く、

○此林の知行を東京をのびしと云ふは又、大坂  
の人と云ふ花家にとまらう例の十の筆と八の筆と二分  
に陣取つたをのびしと云ふや着るのぬらふ方と云  
泣きしける手紙を出す又、この事に乗る由  
に地七回つことと云ふ例に依る由のことと云ふ東京  
に及らし云ふは、その事と云ふ別人の所業の  
ことと云ふは、余の云ふ大坂に及らしことと云ふは  
さういふこと何なるに及らぬか、さういふ事と云ふ  
と其れをいふ事、筆の極の極、さういふ事と云ふは、  
心もわしくさう事、筆と云ふ事、さういふ事と云ふは、  
氣の通すぬと例と云ふ大坂に及らぬことと云ふは、  
例の事と云ふこと、此れをのびしと云ふは、さういふ事

○さういふ一七年七校の坊ん僅に、さういふ坊の坊  
さういふ坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
野もさういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
さういふ一人、二人と云ふ坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
説き及らし、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
七校の坊、余の坊、説きの坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
攻の事、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
俄の事、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊  
さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊、さういふ坊の坊





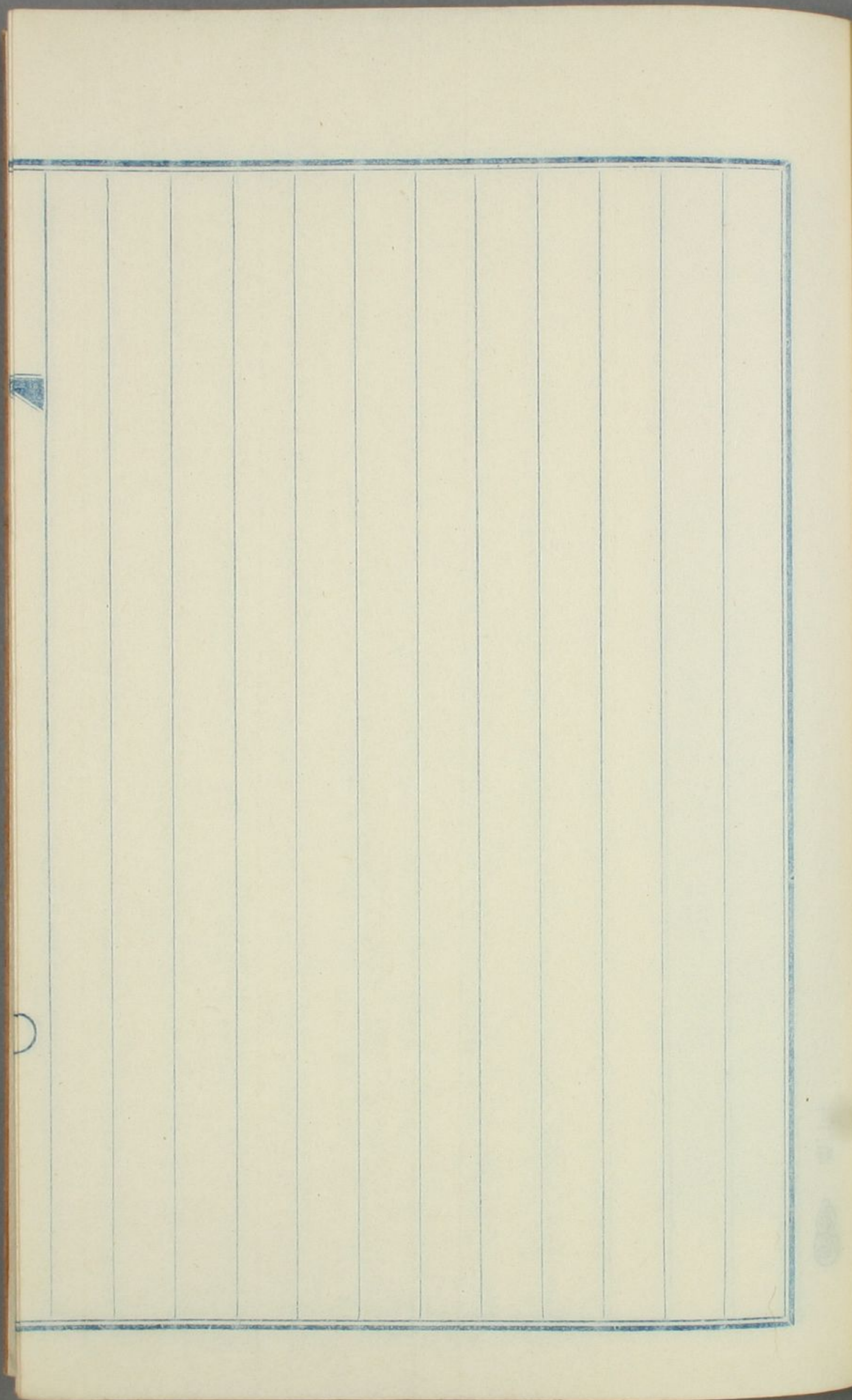
々々誠の如く知念と云ふべきを述べて高次回復の如  
く之を成つたる處に賛成するもの云々貴家のみ  
らざる事也

古の事として五葉の如く其の節を約せしむるに  
あり余の忠告を常にし努力を怠らざるに於て此の  
事なきを由らざる事し高次回復に於けるもの  
申念也

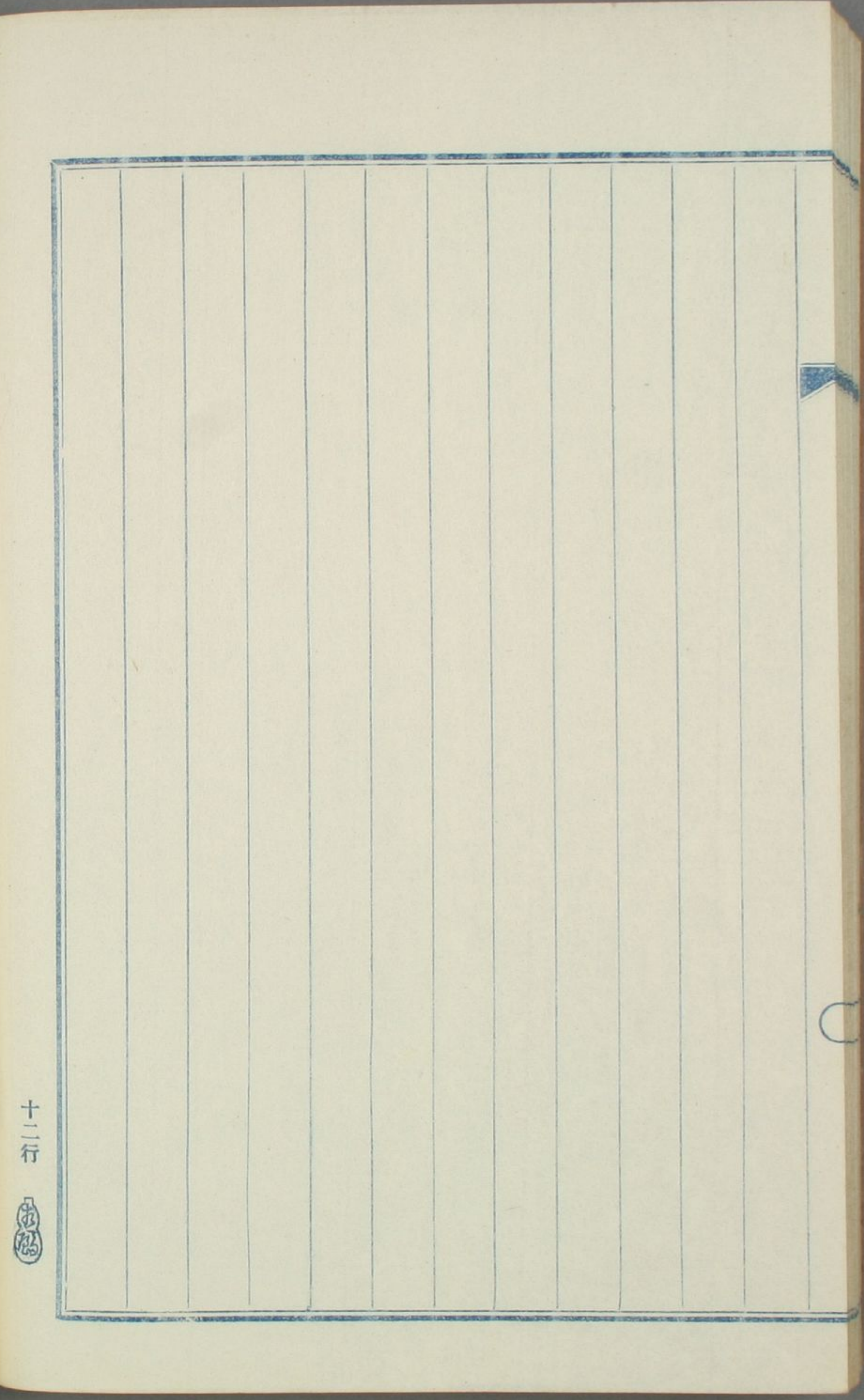
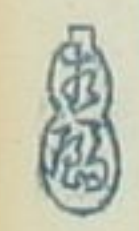
此善集二冊の爲り余志ありて大いに往來  
し廿二月廿日と云ふ事<sup>（註）</sup>目赴正き事なり但  
し此の節書の用は物々を汽東中割しき  
感胃と得て大いに於る後終ヤリ余文を  
高くして御書しなむる所なり

○古の事として五葉の如く其の節を約せしむるに  
あり一聖節を於ける事し此の事書行を交はせ  
る余の力其つて大なりし射行するをせしむ  
る余人の物を世らうと欲せし別しん者意  
骨董の類と好むことぬまが改て森海を  
氣味なる事なり往く所なるものおのれの  
滋味に及するもの也此んや古画の類人に於る  
の危険と動七つん六の類あると云ふことありこの物に  
ありてこの事なり今好む事なりこの岡の事江  
古緑山方とす善し其物と思ひし事江自意に  
もたるとして北行機物の意に事江に於て稀に  
見し所の事なり善し其の類も此の類なり





十二行



以下全て

白紙



